

猿の心

金 沢 篤

人並はずれて丈が高い上にわたしはいつも日和下駄をはき蝙蝠傘を持って歩く。いかに好く晴れた日でも日和下駄に蝙蝠傘でなければ安心がならぬ。これは年中湿気の多い東京の天気に対して全然信用を置かぬからである。変りやすいは男心に秋の空、それにお上の御政事とばかり極ったものではない。 永井荷風

はじめに

『ヒトパデーシャ』の中に、遣手婆 (kuṭṭani) とガンターカルナ (ghaṇṭhākarna) という魔物についての興味深い物語⁽¹⁾ が置かれている。ゴンダの『サンスクリット初等文法書』巻末選文集の冒頭を飾るものでもあるが、好ましからざる職業に従事している一女性のとらわれのない聡明さを謳ったエピソードである。そこで中心的な役割を担っていたのが、ヴァーナラ (vānara) やマルカタ (markaṭa) で名指されている動物、すなわち「猿」である。猿たちは、虎に喰われて死んだ鈴泥棒の遺品となった盗品の鈴 (ghaṇṭhā) に興味を持ち、ひとしきりそれで夢中になって遊んだが、機転のきいた遣手婆の用意した果物 (phala) の前には、手もなく心を翻し、お気に入りだった筈の鈴を手放して、今度はその果物を食べることに熱中するに到る。この結果魔物の内実を形作っていた盗品の鈴は、聡明なる遣手婆の手に帰し、無血の<架空の魔物>ガンターカルナ退治が完了することになる。われわれが今このエピソードで注目すべきは、遣手婆の聡明さではなしに、猿のものとされる典型的な一気質である。猿という動物に結びついているかの、浮わつた、飽きやすい、長続きしない性癖についてである。『ヒトパデーシャ』のこのエピソードに限らず、インドの種々古典にあって猿がしばしばそのような「浮気心」の譬えに起用されるのを見る。「男心 (女心) と秋の空」という箴言を持つわれわれには、「猿の心」とはそうした「男心 (女心)」と重ねて了解すべきものとなる。

本稿は、したがって、インドの種々な古典に見られる、猿、ないし猿の心にかかわるそうしたささいな一面について注目し、恣意的に選び取られた若干の用例に基づいて、それら譬喩的表現が持つ意味について少しく検討しようとするものであるが、もとよりこうした表現の網羅的研究を目指したものでもない。そもそも譬喩的表現とは目的とする描写の理解をより豊穡なものとするべく行われるものと考えられる。だが、サンスクリット語による古典を外国人として受け止める他ない今日のわれわれにとって、その譬喩的表現に逆に戸惑い、困惑することが多々あるのである。したがって、その際のちょっとしたメモ書きに過ぎない本稿が、インド古典における譬喩的表現に関する今後の研究になにがしか資するとすれば幸いである。

1. 仕えるべき人、仕えるべきでない人

そもそも筆者が本稿を企図したのは、『ジャータカ』の第 348 話「森林本生譚」*araññajātaka* に出る以下の詩⁽²⁾に遭遇したせいである。「猿の心」を含むその詩の意味を俄には十全に理解し得なかつた為である。『ジャータカ』はよく読まれ、翻訳も多く、さいわい原典よりの全和訳も既に二種類は公刊されており、この場合は特にそれを参考にしたい。

父親と共に人里離れて林間で修行している息子が、父の不在中、ひとりの女に誘惑されて、父の膝元、林間を離れて、誘惑の多い大勢人のいる都会での修行を思い立つ。父にその旨を告げたところ、父親が都会に出て行こうとする[愚かな]息子に与えた教訓の一つが、以下の (i) に見られる一連の詩である。父は、詩に託して、仕えるべき人 (交わるべき人)、仕えるべきでない人 (交わるべきでない人) を教え諭すのである。その (i) に対する和訳として、比較的簡単に参照できる『南伝大蔵経』所収の立花俊道訳 (1a) と新しい研究成果を反映させた『ジャータカ全集』所収の松村恒訳 (1b) を見てみたい。

(i) yo taṃ ④ viśāsāye tāta ⑤ viśāsañ ca khaṃeyya te ⑥ sussaṃsī ca ⑦
titikhī ca taṃ bhajehi ito gato.

yassa ⑧ kāyena ⑨ vācāya ⑩ manasā na'atthi dukkatam
urasīva patiṭṭhāya taṃ bhajehi ito gato.

① haliddi-rāgaṃ ② kapi-cittaṃ purisaṃ ③ rāga-virāginam

tādisaṃ tāta mā sevi nimmanussaṃ pi ce siyā. (J 435:III-p.525) (J
348:III-p.148)

- (1a) 「倅よ、④人の汝を信頼し／⑤汝の信頼を是とするもの／⑥ [汝の言を] 聴き、⑦ [汝の罪を] 恕すもの／ここを去らば斯の人に仕へよ／人の⑧ 身にも⑨語にも／⑩心にも悪行なくば／ここを去りてはその人の／胸に立てるが如くして彼に仕へよ／
①心安定せずして②猿のそのの如く／③忽ちにして欲に就き忽ちにしてそれを離る 倅よ、人なくとも／斯の如き人に仕ふる勿れ」(立花 [1935] 557-558 頁)
- (1b) 「息子よ、④なんじを信頼し／⑤なんじの信頼に伝えてくれる／⑥従順で⑦寛容なる者、／ここを去りては、そなる者に仕えるべし。／⑧身体、⑨ことば、⑩心もて／悪業をなさざる者の／胸に抱かれるがごとくに、／ここを去りては、そなる者に仕えるべし。
①移ろいやすく、②猿の心を持ち／③種々の食欲に染まりたる人、／息子よ、そなる者に仕えるべからず、／たとえ [よき] 人がなからんとても⁽³⁾。」(松村 [1988]152 頁)

原文を知らずして訳文のみを見る者には、それなりに理解できるのかも知れない。そのように書き記したインド人がいたということにはそれなりに合点がいくのだろう。だが果たしてわれわれは、その詩節の意味を十全に理解できているのだろうか？

さて、(1a) (1b) の二訳である。いずれも大過なく似たりよったり大同小異とも言えるが、しっかりと見てみると随分とその解釈が異なることがわかる。この父からの教訓詩によって、息子が理解すべきは「父親の元を離れて都会に出て修行する」という自らの選択に対する父親の意向でありその否定的論調であって、その教訓詩の文字通りの意味ではないのかも知れない。事情はわれわれ後代の読者の場合も同じである。だが、父親の教訓こそをわれわれは今正しく理解すべきなのである。

問題となるのは関係代名詞節前分の名詞 *purisa/puruṣa* に係る三つの形容句

- ① *haliddi-rāgaṃ /haridrā-rāga* <鬱金の色 // 愛> を持つ
 ② *kapi-cittaṃ /kapi-citta* <猿の心> を持つ
 ③ *rāga-virāginam /rāga-virāgin* <愛 // 色・離貪 [愛] // 褪色> を持つ // <貪 [愛] // 色> 離貪 [愛] する // 褪色する

の意味とそれら三つの形容句相互の関係である。すなわち①の<鬱金の色／

愛>とは何か？②の<猿の心>とは何か？③の *rāga-virāgin* をどう解釈するか？そして、仕えるべきでないのはどのような人なのか？立花、松村訳からはそのいずれもが明確にならない。まず全体として見た場合、「①の人や②の人や③の人には仕えてはならない」ということは明白であろう。微妙な問題だが、これは「①でありかつ②でありかつ③である人」、つまり「①と②と③という三つの条件を同時に兼ね備えた人物」という意味ではない、「①ないし②ないし③、つまり三つの条件①②③のうちのいずれかを備えた人物」という意味である。したがって、①②③の三つの条件そのものも厳密に相互に類別的・排他的なものである必要はないということになる。「①であるかまたは②であるかまたは③である人には仕えてはならない」という解釈こそが妥当する。これは①と②と③の意味の解釈とも深く関連するという点でどうでもよい問題ではない。①と②と③の意味が重複してもいいことを意味している。

註釈には以下のようにある。

(ii) haliddirāgan ti haliddirāgasadisam athiracittam, kopicittan ti lahuparivattitāya makkata-cittam, rāgavirāginan ti muhutten, eva rajjanavirajjanasabhāvam, nimmanussam pi ce siyā ti sace pi sakala-jambudīpatale kāyaduccharitādirahitassa manussassa abhāvena nimmanussam siyā tathāpi tāta tādīsam lahucittam mā sevi, sabbam pi manussapatham vicinitvā heṭṭhāvuttaguṇasampannam eva purīsam seveyyāsīti attho. (J III-p.148)

(2) 「鬱金の色を持つ (*haliddirāga*)」とは、鬱金の色に似た<不安定な心>〔を持つ、である。さらに〕「猿の心を持つ (*kopicittan*)」とは、〔猿というのは〕軽薄に動き回るものであるから、<猿の〔ような〕心>〔を持つ、である。また〕「愛・離愛を持つ (*rāgavirāginan*)」というのは、まさしく瞬時の、<惚れる／染まる・飽きる／褪める>を自性 (*svabhāva*) としている〔ということである。〕「仮に人がいないとしても (*nimmanussam pi ce siyā*)」というのは、仮にもし、全閻浮洲の上に<身体による悪作>などのない人間はいないから、〔仕えるべき〕人がいないと「しても、息子よ、〔そなたは、〕そのような (*tathāpi tāta tādīsam*)」軽薄な心を持つ者 (*lahucitta*) には仕えるべからず。人間の道一切をもよく考えた後に、〔そなたは、〕他ならぬ、先に述べた諸美德を具足した人間に、仕えるべきである、という意味である。(拙訳)

この註釈は、われわれがこうした「譬喩的表現」に満ちた古典を合理的に読

み解く為の一つの方途を明確に示してくれているという点で重要である。そもそも人間が「鬱金の色」とか「猿の心」を持つわけがないのである。人間は人間の色を持ち、人間は人間の心を持つ。にもかかわらず「鬱金の色を持つ」人間、「猿の心を持つ」人間と表現される。単純に言えば、これらで「鬱金の〔色に似た〕色／愛を持つ」人間、「猿〔／の心に似た〕心を持つ」人間が意味されているのである。「鬱金の色を持つ」を註釈して「鬱金の色に似た」と表現されていることで明白である。ところが、実はそのようには註釈されていないのである。「鬱金の色に似ている」のは、「不安定な心」であった。

すなわち、この註釈によれば三つの形容句は以下のように解釈される。

鬱金の色とは、「鬱金の色に似た、不安定な心 (athiracitta/asthira-citta)」と註釈される。したがって「鬱金の色を持つ」という形容句は「鬱金の色に似た不安定な心を持つ」となる。

「猿の心 (kopicitta) を持つ」とは、「軽薄に変化するもの」(lahuparivattitāya/laghu-parivṛttitā) であるが故に猿の心 (makkaṭacitta/markaṭa-citta)、「[その猿の心を持つ]」と註釈される。

「色／愛欲・褪色／離欲する」とは、「瞬時的な～発色／愛欲・褪色／離欲を自性とする」と註釈される。この註釈の注目すべきは、ある種の人間の様態を表す三つの形容句①②③が、それぞれ別の人物を指示するのではないように見える点である。したがって三種類の人間が指示されているのではないと解釈する道が示されている。

「①心安定せずして②猿のそのの如く③忽ちにして欲に就き忽ちにしてそれを離る」と訳した立花氏の (1a) はその意味でかなり註釈の立場に近いと言える。①②③の三つの形容句である種の一人の人物を描こうとしていると理解しているように見えるからだ。

松村氏の (1b) は、男 (人) にかかる三つの形容句①②③をそのまま訳出して併記している。立花氏同様やはりその三つの形容句が同時に妥当するある一人の人物を問題にしているのだろうか？ つまり、立花氏的に①かつ②かつ③な人物か、あるいは、①あるいは②あるいは③のいずれかの人物だろうか？ 訳文からはそれが必ずしも明確にはならない。

だが、松村氏は 348 話に対する訳註 (13) に於いて各種先行翻訳を踏まえて、以下のような物々しい見解を披露している。

「rāgavirāginam:Francis 訳は不明瞭であるが、Dutoit、立花は詩註に基づい

て「忽ちにして欲に就く忽ちにしてそれを離る」とするが、「忽ちに」の義はこの語形からは導きを得ず、また *haliddirāgam* と (Ce, SE *halidda*; Kern, *Bijdrage*, bl.73 n. 1) と意味が重複する。Kern はこの合成語が “eene-kleur— andere kleur” プラス -in であることを見抜きながら、意味としては前述のものを採っている (*Bijdrage*, bl.73)。ここでは“種々の”の意味を表わす *Āmredita* タイプ合成語と認めるべきである。・・・」(314-315 頁)

松村氏の解釈の子細を論う遑のない筆者だが、この註記によって、氏が①②③はそれぞれ、ある人物の各別の様態を表す形容句と理解している点が知れる。Dutoit、立花(や、Kern)は、先に見た註釈に依拠して、「忽ちにして欲に就く忽ちにしてそれを離る」のように訳しているが、何よりも①の意味との重複を避けるためにも、自身はその解釈を採らずに「種々の貪欲に染まりたる」とするということである。三形容句の意味の重複を配慮する松村氏は、ならば②をどのような形容句と理解したのだろうか。②であるが、人間が実際は「猿の心」を持つはずがないにも拘わらず、そのままに放置している点に注目すべきであろう。人間が「猿の心」を持つとはどのようなことなのかを明確に示していないのが松村訳の致命傷である。しかも、松村氏が各別の①②③を同時に備えた一人の人物を考えているのか、そうでないかは必ずしも明確ではない。筆者の立場は①の人物には仕えるべきではないし、②の人物にも仕えるべきでないし、③の人物にも仕えるべきではないと解するものである。先にも述べたように、松村氏とは異なって、①②③の形容句は必ずしも「類別的」である必要はないという点で、註釈の立場、立花氏の立場に通じるものとも言える。①②の形容句の意味はひとまずおいて、筆者は問題の詩節に対してとりあえず以下の(1c)のように訳文を与えておきたい。

(1c) 息子 (tāta) よ、④そなたを信じ、[かつ] ⑤そなたの信を容れ、[かつ] ⑥従順にして、[かつ] ⑦我慢強い人、その者に、ここを去ったならば、[そなたは] 親近すべし。⑧身体によるものにせよ、[ないし] ⑨口によるものにせよ、[ないし] ⑩意によるものにせよ、悪作の [決して] 存しないその者に、ここを去ったならば、[そなたは] 胸に依止するようにして、親近すべし。かりに[他に] 人がいないとしても、①鬱金の色 (*haliddi-rāga*) を持つ人、[ないし] ②猿の心 (*kapi-citta*) を持つ人、[ないし] ③熱しやすく冷めやすい (*rāga-virāgin*) 人、そのような人 (*purisa*) に、[そなたは] 仕えるべきではない。(拙訳)

筆者の理解するところはこうである。「彼は①若くて②賢くて③ハンサムである。」この「彼」に係る三つの形容句①「若い」②「賢い」③「ハンサムな」と、今の場合の三つの形容句①「鬱金の色を持つ」②「猿の心を持つ」③「愛と離欲を持つ」とを同じように考えるべきではないということである。相互に補完的な前者に対して、後者は①②③のいずれか一つの条件を満たしている人物を問題にしているのである。相互の形容句の意味が重複することがあってもいっこうに差し支えないのである。その形容句のどれか一つに該当する人物は遠ざけよと父親は馬鹿な息子に忠告しているのである。一方息子に対して肯定的に積極的に仕えることを勧める人物としてあげているのは④⑤⑥⑦という四つの条件をすべて完備していることが求められる。それは言葉の上では、接続詞の *ca* がきちんと使用されていることから諒解できるであろう。さらに、身口意のいずれかによる悪業を持たない者の⑧⑨⑩である。ここにも①②③の場合と同様、接続詞の *ca* が用いられていないことに注目すべきであるが、この場合はことそう単純ではない。このような場合には、*ca* は使用されないことは、以下の『ダンマパダ』の有名な用例からも明らかである。

(iii) *yassa* ⑧ *kāyena* ⑨ *vācāya* ⑩ *manasā na'atthi dukkatam*

saṃvuttam tīhi ṭhānehi tam ahaṃ brūmi brāhmaṇam //391// (Dhp 391:p.110)

(3) ⑧身体によるものにせよ、[ないし] ⑨口によるものにせよ、[ないし] ⑩意によるものにせよ、[一切の] 悪作が存しない、三つの状態に関して節度のあるその者を、わたしは「バラモン」と呼ぶ⁽⁴⁾。(拙訳)

だが現在回収されているサンスクリット文では以下のように *ca* が用いられているのである。この *ca* の用法はある意味では微妙にして変則的である⁽⁵⁾。

(iv) *yasya* ⑧ *kāyena* ⑨ *vācā ca* ⑩ *manasā ca na duḥkṛtam /*

susaṃvṛtam ṭṛbhiḥ sthānair bravīmi brāhmaṇam hi tam // 33.16 [971] (Uv XXXIII-16:p.158)

(4) ⑧身体による悪作が存しない、かつ⑨口による [悪作が存しない]、かつ⑩意による [悪作が存しない]、その三つの状態に関して節度のあるその者を、わたしはバラモンと呼ぶ⁽⁶⁾。(拙訳)

ジャータカの問題の詩節 (i) を理解するための問題点を論う本節を閉じるにあたっては、もう一点問題にしておかなければならない。それは所有複合語

バフヴリーヒ Bahuvrīhi の解釈をめぐる問題である。問題の①「鬱金の色を持つ」②「猿の心を持つ」との形容句を形成するのがこの所有複合語であるからだ。鬱金ならぬ人間、猿ならぬ人間が「鬱金の色を持つ」「猿の心を持つ」というのはいったいどういうことなのだろうか。

立花訳 (1a) は、先にも触れた通り、註釈 (ii) の理解をかなり率直に反映させたものと言える。この複合語の解釈法に絡めては、筆者はとくに立花訳 (1a) の「猿のそれの如く」という訳語に注目したい⁽⁷⁾。松村訳 (1b) での、訳注ですら何一つ言及されることなしに「猿の心を持ち」と放置されていたのとは大違いである。

これまで日本人によって書き著わされた最も精緻な文法書、辻 [1974] から関連する用例を引いてみよう。

(イ) padma-gandhi- 「蓮華の香りある」 (233 頁)

(ロ) vyāghra-pad- 「虎の足のごとき足をもつ」 (234 頁) tiger-footed

(ハ) candra-ānana- 「月の顔をもつ」 (234 頁) (比喩)

(ニ) padma-akṣa-/kamala-netra 「蓮華の眼をもつ」 (234 頁) (比喩)

(ホ) vidyut-prabha- 「電光のごとき輝きをもつ」 (234 頁) (比喩)

いかがだろうか? (ハ) や (ニ) に関しては筆者自身かつて少しく論じたことがある⁽⁸⁾ が、今問題になっている立花訳の「猿のそれの如く」は、(ロ) の場合である。「猿の心を持つ」とは、「猿の心のごとき心を持つ」という意味で、立花訳のその文言は、そうした解釈を明確に示している。「Bv. はあらゆる種類の複合語から作られる」(234 頁) と言われ、それ自体複雑な様相を呈する所有複合語の問題であるが、列挙された具体例を通して類型化を試みるならば、例えば Deshpande [1997] が、**madhyamapadalopin bahuvrīhi** として説明する以下の二つのタイプに集約されるように思われる。

kamalanayanā (kanyā) < kamale iva nayane yasyāḥ sā

“she whose eyes are like lotus-flowers”

mṛṅganayanā (kanyā) < mṛṅgasya nayane iva nayane yasyāḥ sā

“she whose eyes are like the eyes of a deer” (Deshpande [1997], p.272)

それぞれ日本語では、「蓮華の目を持つ (少女)」「鹿の目を持つ (少女)」と訳し得る複合語である。ただし、前者は「蓮華のような目を持つ」、後者は「鹿

の〈目の〉ような目を持つ」のことである。複合語を構成する肢分として、後者の場合、本来あるべき真ん中の肢分である〈目〉が消失していると説明されるのである。先に引いた辻[1974]からの用例(イ)から(ニ)では、(イ)(ロ)(ホ)の三用例が、「蓮華の〈香りの〉ような香りを持つ」「虎の〈足の〉ような足を持つ」「電光の〈輝きの〉ような輝きを持つ⁽⁹⁾」と解すべきで、今の後者の場合である。

問題点とはこうである。「鬱金の色を持つ」と「猿の心を持つ」の両者が、上記二例との関わりで、どう解釈すべきなのかということである。目とか足とかの場合は、明白である。蓮華には目はないし、鹿には目はある。鬱金には色はあるが、心とか愛の場合は、ことほどさように簡単ではないのである。われわれに明白なのは外面的な様態とか行動とか振る舞いだけなのである。しかもわれわれ人間の場合には心とか愛とかいうものは、自分の個人的な経験からしても、そういう名称で呼ばれるモノがわれわれの内部にあると言い得ることを知っている。だが、猿とか鬱金の内面までは知りようがないのである。鬱金と呼ばれる植物に「愛」を問題にしようという気持ちは通常起きない。「畜生」とまで呼び得る「猿」の心も通常は問題にしないのである。科学的な立場に立てば、あるゆる生物の行動・振る舞いは、それを命じる内面の心／愛の所産であると言い得るかも知れない。その意味で人間の心／愛を問題にするように、猿にも心／愛を問題に出来るのであろう。

譬喩的表現の基本は二つのモノの間の比較である。「比喩するもの」と「比喩されるもの」である。修辞学の立場からすれば、*upamāna* と *upameya* の問題である⁽¹⁰⁾。「AはBのようだ」Aが *upameya* であり、Bが *upamāna* である。「鬱金の色を持つ」「猿の心を持つ」という譬喩的な表現の根底にある比較とはいかなるものか、という問題と言い換えてもよいのである。次節では、その観点を顧慮しつつ、「鬱金の色」と「猿の心」についていまま少し子細に検討してみたい。

II. 鬱金の色 *haridrā-rāga/haliddī-rāga*

さて、前節では『ジャータカ』中に見られる「仕えるべき人、仕えるべきでない人」の表現中に「猿の心」が用いられていることを確認し、従来の解釈についての若干の問題点を論じた。本節では、その「猿の心」と並んで用いられた「鬱金の色」について検討してみたい。「鬱金の色」とは数ある色表現の一つで、ある色を名指す言葉と見なすことが可能である。

鬱金とは「ショウガ科の多年草。アジア熱帯原産、沖縄でも栽培。根茎は肥大して黄色。葉は葉柄とともに長さ約1メートル。夏・秋に花穂を生じ、卵形白色の苞を多くつけ、各苞に3～4個ずつの淡黄色唇形花を開く。根茎を止血薬・香料やカレー粉・沢庵漬の黄色染料とする。キゾメグサ。「鬱金の花」は〈国秋〉。〈易林本節用集〉「〔広辞苑第五版〕」である。また鬱金色とは「ウコンの根茎で染めた濃い鮮黄色。⁽¹¹⁾」(同)

サンスクリットでは *haridrā*、パーリだと *haliddā/haliddī* がその植物「鬱金」を指すもののようだ⁽¹²⁾。古典作品などにも時に登場する。「彩られる、彩る、赤くなる」を意味する動詞 *raj-,rañj-* に由来する色 (*rāga*) は、同時に愛 (*rāga*) を意味する語として、やはりしばしば用いられる。

各種サンスクリット辞典などによれば、その鮮やかな黄色はどうやら、色褪せやすいものようだ。そして色 (*rāga*) が愛 (*rāga*) に転じて、「覚めやすい愛」、「気紛れな愛」という意味でも用いられるに到ったようだ。鬱金の色に関して知るところの少ない筆者だが、以下には、現在流布している各種辞典の記述を見てみたい。

『梵和大辞典』には、
「*haridrā-rāga* / うこん (の色と同じ長さだけ続く) 愛情をもつ、移り気なまたは浮気な、気まぐれな」(1549 頁)、

水野弘元著『二訂 パーリ語辞典』*haliddhā,haliddī* の項目には、
「*rāga* / うこん色の、速変せざる」(329 頁)

とある。サンスクリットとパーリの両語は文字通り対応するものと考えられるが、水野辞典の「速変せざる」は「速変する」の誤りであろう。こうした日本人によって編まれた辞典の記述は、当然ながら外国人によって編まれた各種辞典の記述を反映させたものである。

Monier-Williams の梵英辞典には “*haridrā-rāga*” として
“‘[turmeric]-coloured, unsteady in affection or attachment, fickle, capricious (like the colour of turmeric which does not last)’ ” (p.1291)
《鬱金色をした、愛欲に関して不安定、[持続しない鬱金の色のように] 気まぐれ、変わりやすい》

Apte の梵英辞典には “*haridrā-rāga, -rāgaka*” として
“1.turmeric-coloured. -2.unsteady in attachment or affection, fickle-minded (as a lover) ; (thus defined by Halāyudha :— *kṣaṇa-mātra-anurāgaś ca haridra-rāga*

ucyate) ”. (p.1760)

《1. 鬱金色をした、2. 愛欲に関して不安定、[恋愛者として]は気まぐれな心の、ハラーユダの定義によれば、<刹那のみの着色・懸想が、鬱金色・愛と言われる>。(13)》

これらの各種辞典の記述よりすれば、ある人物の様態として、「鬱金の色を持つ」は、先に見た註釈 (ii) を待つまでもなく、変わりやすい心の持ち主を指して用いられる詩的・譬喩的表現ということになる。

また、人物の形容句として用いられた「鬱金の色」に関しては、『カーマースートラ』「撚りを戻す方法」VI-4-17 中の以下の用例 (v) とそれに対するヤシヨーダラによる註釈 (vi) を検討してみることも重要であろう。

- (v) *bālo vā na'ekatra-dṛṣṭīr atisaṃdhāna-pradhāno vā haridrā-rāgo vā yat kiṃcana kāri vā'ity avetya saṃdadhyān na vā // (Ks,p.336,ll.10-11)*
- (5) 一所への視線 (*ekatra ~ dṛṣṭi*) を持つことのない幼童なのか、或いは[その者が] 欺いてばかりいる者なのか、或いは何某かの作為を為す[その者が] 鬱金の色 (*haridrā-rāga*) [気まぐれな愛を持つものなのか?] を了解して、「撚りを戻すか、或いは撚りを戻さない。(14)」（拙訳）
- (vi) *haridrā-rāga iva rāgo yasya na cira-sthāyī / mayi virakto yatra gatas tatra'ativiraktaḥ sutarāṃ gantu-kāmaḥ kiṃ dāsyati / yat kiṃcana kāri vā so'anartham api kuryāt / ity evam avetya jñātvā saṃdadhyāt prathame pakṣe / na vā'iti / na'eva saṃdadhyāt dvitīyā'iti (iti dvitīye) / (YKs,p.336,ll.12-15)*
- (6) その者の愛 (*rāga* → 色) が長続きし (*cira-sthāyin*) ないような、[その者は] 鬱金の色 (→愛) (*haridrā-rāga*) を持てる者の如き (*iva*) である。わたしに懸想した者 (*virakta*) が、[別の] ある者に到って、その者に、速やかに過度に懸想する (*ativirakta*)、[その] 気まぐれな愛 (*āgantu-kāma*) を持てる者は、一体何をもたらずであろう。何某かを為すところのその者は、不利益をもたず為すことであろう。以上をそのように了解した後に、[すなわち] 知った上で、撚りを戻すべきであろう、と云うのが、第一選択肢である。あるいは撚りを戻さない、というのが、第二選択肢である。(拙訳)

本節を閉じるに当たり、鬱金に関しては『ジャータカ』326 話「カッカール花前生譚」の Kern[1888] も言及している⁽¹⁵⁾ 以下の用例 (vii) の *ahālidā* に一

瞥しておきたい。立花訳、松村訳と共に拙訳を付し、興味深い註釈 (viii) も拙訳と共に引いておく。

(vii) *yassa cittaṃ ahālidam saddhā ca avirāginī*

*eko sādum na bhuñjeyya sa ve kakkārum arahatīti.*108 (J 326:III-p.88*)

(7a) 「その心黄金を望まず その信心また堅固に 独り甘きを食ふなきもの 彼こそはカッカールを着くるに適すれ」(立花 [1935] 453 頁)

(7b) 「その心は鬱金にて染められず (= 移ろいやすからず)、 / 信仰も色あせることなく、 / ただ一人甘きを食することなき者 / かれにこそカッカールはふさわしけれ。」(松村 [1988] 91-92 頁)

(7c) 鬱金の色を持たない (ahālidā) 心 (citta) と色褪せない (avirāgin) 信 (saddhā) のある、ひとり甘味を享受しないだろう、その者が実にカッカール (kakkāru) に相応しいのである、と。(拙訳)

註釈には以下のようにある。

(viii) *yassa puggalassa cittaṃ ahālidam haliddirāgo viya na khippam bhijjati cirapemam hoti, saddhā ca avirāginī kammaṃ vā vipākaṃ vā okappanīyassa vā puggalassa vacanam saddahitvā appamattaken' eva na chijjati na bhijjati, yo ca yācanake vā aññe vā saṃvibhāgārahe puggale bahikatvā eko va sādurasabhojanam na bhuñjati saṃvibhajitvā va bhuñjati so imāni pupphāni arahatīti.* (J III, pp.88-89)

(8p) 「その者の」とは、[その] 人物の、[ということであり、] 「心が、鬱金の色を持たない」、とは、「鬱金の色のように、速やかに褪せることがない」[ということであり、] 「長続きする愛をもつ」ということである。そして「心が、色褪せない」・・・(後略) (拙訳)

この註釈 (viii) の解釈で注意すべきは下線を付した *haliddirāgo viya na khippam bhijjati cirapemam hoti* の部分である。「鬱金の色のように速やかに褪せる、ことがない」と解釈しないと「鬱金の色」を「速変せざるもの」と逆に誤解することになる⁽¹⁶⁾。

さて、次節では「猿の心」に関して検討してみたい。そのためには猿そのものについての論究が不可欠であろうが、様々な制約の下にある本稿ではそれもままならない。若干の用例について詮議するに留まるであろう。

III. 猿の心 kapi-citta

前節では「鬱金」と「鬱金の色」に関して検討した。本節では、インドの古典に現れる「猿」ないし「猿の心」に関わる表現を見てみたい。

『アマラコーシャ』には、猿を現わす同義語として以下のように出てくる。

(ix) kapi-plavaṅga-plavaga-śākhāmṛga-valimukhāḥ /

markaṭo vānaraḥ kiśo vanaukā atha bhalluke //3// (Ak II -5-3)

① kapi (動揺者 <kamp-)> ② plavaṅga (跳躍行者) ③ plavaga (跳躍行者)

④ śākhāmṛga (枝獣) ⑤ valimukha (皺顔者) ⑥ markaṭa (悪作者 <mṛc-)

⑦ vānara (森住者 <vana)> ⑧ kiśa (裸者) ⑨ vanaukas (森住者 <vana)> ⑩

bhalluka <吉祥者>

「猿」という動物を指示する語が列挙されているだけで、その語の成り立ちなどについては触れられていないが、語源などからざっと意味を割り当ててみたものを付しておいた。きわめて主観的なものであり、学術的には何一つ価値のないものであるが、「猿」という動物がどのようなものとしてインドでは古来考えられてきたかを伺う資料にはなるだろうか。今問題にしている「猿の心」の猿は kapi であり、「揺れる」「震える」という意味の動詞 kamp- に関わりのある語であることは意味深いものと言える。「猿の心」で「揺れる [者] の心」ないし「揺れる心」が直ちに導き出される。A は kapi-citta の持ち主という表現は、「猿（動揺者）」を媒介とすることなしにも当初の目的を果たすことが出来るように思われる⁽¹⁷⁾。

『大宝積経』「迦葉品」には、心についての興味深い記述が見られる。そこに以下のように「猿」vānara が引き合いに出されている。

(x) cittam hi kāśyapa vidyu-sadṛśa kṣaṇabhaṅgha-avyavasthitam 8/ cittam hi kāśyapa ākāśa-sadṛśam āgamtuker upakleśe sam-[50a5] kliśyate 9 cittam hi kāśyapa vānara-sadṛśa viśaya-abhilāṣi vicitra-karma-samsthānatayā 10 cittam kāśyapasya citra-kara-[50b1]sadṛśa vicitra-karma-abhisamskaraṇatā /..... (Kp 99:p.145)

(10a) 「・・・(九九) カーシャパよ、心は稲妻に似ている。(善の心がひらめいても) 瞬間に消滅して、片時もとどまらない。カーシャパよ、心は虚空に似ている。偶然的な(煙などの) 汚れによって汚される。カーシャパよ、心は猿に似ている。(いつも) ものほしげであり、さまざまな行

- 為（業）を形づくるから。カーシャパよ、心は画家に似ている。さまざま
 な行為をあらわして見せるから。・・・」（長尾・桜部 [1974/2003]79 頁）
 (10bp)「・・・カーシャパよ、心 (citta) は、猿 (vānara) に似ている (sadṛśa)、
 色とりどりの行為を為すものにして、対境に対して貪欲である (abhilāśin)
 から。・・・」（拙訳部分）

『ヒトローパデーシャ』の中には猿の気質に関して貴重な記述が見られる。それが以下の用例である。

- (xi) anantaram sa ca sahaja-capalatayā mahatā prayatnena tam kīlakam
 ākṛṣṭavān / ākṛṣṭe ca kīlake cūrṇita-aṅḍa-dvayaḥ pañcatvam gataḥ /
 (H[K],p.36)
- (11) そして直ちにその [猿 =vānara] は、生来の (sahaja) 動揺者性 (capalatā)
 により、大なる努力で、その楔を引き抜いた。そして、楔が引き抜かれた
 時、二つの睾丸がすり潰された [猿] は、五大性 [=死] に到った。（拙訳）
- (xi') anantaram / sahaja-cañcalatayā mahatā pratyānena[prayatnena?] kīlakam
 ākṛṣṭavān / ākṛṣṭe ca cūrṇita-aṅḍa-dvayaḥ pañcatvam upāgataḥ / (H,p.51)
- (11') 「《マガダ地方のダルマの森の近くの土地で、シュバダッタという名の写
 字生が寺院の建築をはじめた。その場所には鋸で挽きかけた材木があり、
 その材木には途中まで二つに挽き割かれ、その間に楔がうち込まれていた。
 そこに森に住む強大な猿の群が遊びにやって来た。その時一匹の猿
 が死神の刑杖に追い立てられたのか、楔を両手でつかまえて坐った。す
 るとぶら下がっていた両方の睾丸が、二つに割れた材木の裂け目に這入
 った。》猿はその時、持って生れた気紛れの性質から、力をこめて楔を
 引き抜いた。引き抜いた時にその猿は、両方の睾丸をつぶされて死んだ。
 《それで俺は、／「己が務めにあらざるを、云々」と言ったのだ。》」（金倉・
 北川 [1968] 91 頁）

また『スッタニパータ』には猿 (kapi) についての興味深い記述がある。

- (xii) purimaṃ pahāya aparaṃ sitāse
 ejaṇugā te na taranti saṅgam,
 te uggahāyanti nirassajanti
 kapiva sākhaṃ pamuñcam gahāya.//791// (Sn 791:p.155)

- (12) 前者を捨て、後者に依止し、動きに随順せる、かれらは、執着を越えることはない。かれらは、枝 (sākha) を掴んでは離す猿 (kapi) のように、掴んでは離すのである⁽¹⁸⁾。(拙訳)

さらに『テーラガータ』には以下の用例 (xiii) が見られる。

- (xiii) uddhato capalo bhikkhu paṃsu-kūlena pāruto

kapi va siha-camma na so ten' upasobhati.//1080//

anuddhato acapalo nipako samvutindriyo

sobhati paṃsukūlena siho va girigabbhare.//1081// (Therag, p.96)

- (13) 糞掃衣を纏っている比丘は、浮わつていて (uddhata)、動揺する (capala) ならば、[浮わつていて、動揺する] 猿 (kapi) が、獅子の皮を [纏っていても、その獅子の皮によって、輝くことがないのと] 同様に、その者が、その [糞掃衣] によって、輝くことはないのである。(1080) 浮わつくことなく (anuddhata)、動揺することのない (acapala)、感官を制御している、糞掃衣を [まとっている] 賢者は、輝くのである。山窟にあって、[浮わつくことなく、動揺することのない]⁽¹⁹⁾ 獅子が [輝くのと] 同様に。(1081) (拙訳)

また『ダンマパダ』334には以下のようにある。

- (xiv) manujassa pamattacārino

tanhā vaḍḍhati māluvā viya,

so palavatī hurāhuram

phalam icchaṃ va vanasmi vānaro . (Dhp 334:p.94)

- (14) 放逸に行動する (pamatta-cārin) 人間 (manuja) には、愛執が蔓草のように蔓延る。かの [人間] は、森の中を猿 (vānara) が果実を求めて [さすらう] ように、此処彼処をさすらう⁽²⁰⁾。(拙訳)

人間の性情を猿と比較した上でなされた譬喩的表現を含む以上の諸用例 (x) (xi) (xii) (xiii) (xiv) を通して、「猿」がインド古来どのような動物と考えられてきたかを伺うことが出来るが、その場合「猿の心」が引き合いに出されることはないのである。その意味で注目すべきは、人間の持つ「心」一般を、「猿」との比較で描写している (x) の譬喩的表現は格別なものと言える。[人間の] 心が、猿の心ではなく、猿そのものと比較されているのである。「[人間の] 心は猿のようだ」という『大宝積経』「迦葉品」の記述 (x) に注目すべきであろう。「ある種の人間は、人間というよりは、猿のようだ」という用例 (xi) (xii) (xiii)

は、確かに生物としての人間と生物としての猿が比較されており、「人間の心」と「猿の心」の比較までほとんどもう一步のところまできていると言える。「猿の<心>のような心を持つ」、立花訳の「猿のそのような」心を持つ、との解釈を可能とするものと言える。だが筆者は、問題の『ジャータカ』の用例 (i) の「猿の心を持つ」を、『大宝積経』「迦葉品」の記述 (x) の助けを借りることによって、「猿のような心を持つ」との解釈の可能性を示したかったのである。

各種サンスクリット辞典には *haridrā-rāga* は立項されているものの *kapi-citta* は立項されていない⁽²¹⁾。人は通常猿にも心があるなどとは夢にも思わないのではないか。だが猿などの動物も物語の登場人物たり得るインドのことである。動物同志の会話、人間と動物との会話のある物語にも事欠かないインドである。『ヒトーパデーシャ』や『パンチャタントラ』などの動物寓話、仏教でも『ジャータカ』の類い、そして何よりも猿が活躍する壮大な物語『ラーマーヤナ』を持つインドである。以下には『ラーマーヤナ』から「猿の心」に関わる用例をランダムにピックアップして虚心に検討してみたい。

- (xv) *nityam asthira-cittā hi kapayo hari-puṅgava /
na'ājñāpyaṃ viśahiṣyanti putra-dārān[-dāraṃ] vinā tvayā //9// (R[C] IV-53-9//R IV-54-9:ii p.141)*
- (15) 最勝の猿 (*hari-puṅgava*) よ、猿 (*kapi*) というものは、常に (*nityam*)、不安定な (*asthira*) 心 (*citta*) を持つものに他ならない。[したがって] 息子や妻たちなしでは、[かれらは] あなたによって命じられたことから、耐えるだろうことはないのである。(拙訳)
- (xvi) *capalā hy avinītās[avināthās?] ca cala-cittāś ca vānarāḥ /
na sahiṣyanti te nādaṃ siṃha-nādam iva dvipāḥ //9// (R[C] VI-45-9//R VI-57-9:iii p.139)*
- (16) 実に、動揺し (*capala*)、陶冶されていない (*avinīta*)、移ろう心の (*cala-citta*) 猿 (*vānara*) たちは、あなたの叫び声に耐え得ないであろう。象たちが、獅子の吠え声を [耐え得ない] ように。(拙訳)
- (xvii) *samikṣya bharato vākyam uvāca pavana-ātmajam /
kaccin na khalu kāpeyī sevyate cala-cittatā /
na hi paśyāmi kākutsthaṃ rāmaṃ āryaṃ paraṃtapam //17// (R[C] VI-115-17//R VI-127-22cd ~ 23:iii p.377)*
[*kaccin na ca'anudrśyante kapayaḥ kāma-rūpiṇaḥ /* (R VI-127-24ab:iii

p.377)

- (17) バラタは風神の子 (pavana-ātmaja=hanumat) を見た後、[以下のような] 言葉を発した。

「[あなたは] 猿のもの (kāpeya) である、移ろう心 [のような] 性質 (cala-cittatā) を、持ってはいませんか？ なぜなら、カクトスタの末裔 (kākutstha)、敵にとっての災いたる、聖なるラーマをわたしは見ていないのですから。また、自在な姿を取る猿 (kapi) たちが見られているということもないのですから。⁽²²⁾」(拙訳)

この『ラーマーヤナ』の用例 (xv) (xvi) (xvii) では、猿にも心があり、「猿の心」は、「不安定」で、「移ろうもの」と明記され、それが猿 [固有の本来的な] ものであるとまで言われているのである。その一方で、『ラーマーヤナ』には、人間を含めて生物の考え／心というものは「移ろうもの」「無常」という考え方のあることも明確に示される。以下の用例 (xviii) (xix) である。

- (xviii) tad yāvad eva me ceto na vimuhyati rāghava /

tāvad eva[^]abhiścvasva calā hi prāṇinām matiḥ //20// (R[C] II-4-20)

tad yāvad eva me ceto na vimuhyati rāghava /

tāvad eva[^]abhiścvasva calā hi prāṇinām matiḥ //20// (R II-4-20:i,p.13)

- (18) 生き物 (prāṇin) の考え (mati) は移ろうもの (cala) だから、ラーガヴァよ、わが心 (cetas) が失せない間に [われは] 灌頂を為すべし ⁽²³⁾。(拙訳)

- (xix) kiṃ tu cittam manuṣyāṇām anityam iti me matiḥ /

satām ca dharma-nityānām kṛta-śobhi ca rāghava // 27// (R[C] II-4-27)

kiṃ nu[tu] cittam manuṣyāṇām anityam iti me matam /

satām ca dharma-nityānām kṛta-śobhi ca rāghava //27// (R II-4-27:i,p.13)

- (19) しかるに「人間たちの心は無常である」というのがわたしの考えである。そして、ダルマを常としている善者たち [の心は／心に対しても、その考えは] 妥当するのである、ラーガヴァよ ⁽²⁴⁾。(拙訳)

この二例 (xviii) (xix) などは、『大宝積経』「迦葉品」の問題の記述 (x) に通底するものとして重要である。

当初「猿に心があるのか？」という否定的な設問すら用意していた筆者にとって、「猿の心」をこの上なく率直に表現しているのが今見た『ラーマーヤナ』である。これを洗い直すのは、「心とは何か？」という問いかけとも深く関連

する問題であって、本小論の及ぶところではない。

筆者は「猿の心をもつ」という表現に対して、「猿のように [せわしなく動き回る] 心をもつ」との解釈を提示したいと考えた者であるが、「猿の [心の] ように [せわしなく動き回る] 心を持つ」との解釈を支えるものが、「猿にも人間と同じような心」があり、猿の様々な行動は、人間の様々な行動が心によって統括されているという「動物科学」にも通じる古代インド人の科学的な意識の存在であろう。今日のわれわれからしたら、「猿にも人間と同様心がある」との知見に容易に与し得るが、したがって「猿の心をもつ」との譬喩的表現に遭遇したら、直ちに「猿のそのような心をもつ」と解釈したくなるのである。こうした常識的な解釈に抗する根拠はたかだか『大宝積経』「迦葉品」に見られる「心を猿に喩える」用例の存在である。心一般について分析した結果、「心は猿のようである」との結論に達着しての記述だ。ならば人は誰であっても「猿の心をもつ」と表現し得ることになる。だが、現実には「猿の心を持つ」人と「猿の心を持たない」人の両者がいるのである。これはどうしたことだろうか？ 問題のジャータカの父親が愚かな息子に教え諭すべく用意した詩節 (i) 中の「猿の心を持つ」とはどのようなことを意味しているのだろうか？ 「猿の<心の>ような心を持つ」人とそうでない人がいる。ここに伺われる思想とは、人は生まれた時はみな「猿の心を持つ」人であるが、それが某かの経験を経ることによって「猿の心を持たない」人になることができる、というものではないだろうか。この某かの経験とは、では何だろうか。これが、先の『ラーマーヤナ』の用例 (xv) にもほの見えていた「陶冶されていない (avinīta)」という語によって示されているのである。猿は「陶冶されていない者」の代名詞である。人は修行し精進しなければならない、「猿の心」を持って生まれた人は心を陶冶し鍛えて「猿のように野蛮な心」を他の「洗練された心」に変える必要があるといった思想である。その意味で人の「心」を野生の「猿」のようだと評した『大宝積経』「迦葉品」が、それに対置するに「犬の心」を用意していることはまことに重要であると思われる。猿のような「心」をもって生まれてくる人間たちの中に「犬の心」を持つ人間もいることがポジティブに描かれているのである。

(xx) yad uta ṣaṭ-pāramitā-bodhisatva-piṭaka-paryeṣṭi śva-sadrśaś ca bhavati
nirmāṇatayā sarvasatveṣu dharmalābhasaṃtuṣṭaś ca bhavati/ (Kp,6,p.13)

(20) 「すなわち、六波羅蜜 (を説く) 菩薩藏を求める。そして、すべての衆

生に対して高慢心がないから、犬のごとく（従順で謙虚）である。また、
 (2) 法を得ることによって満足し、・・・」（長尾・桜部 [1974/2003] 16 頁）
 (20bp)・・・そして、一切の衆生に対して、高慢心のないことによって、犬の
 ように (*śva-saḍṛṣa*) なり (*bhavati*)、・・・（拙訳部分）

(xxi) *nityaṃ ca so....yukto*
upāyakaūśaly aṭha bodhipīṭake /
nirmānatāyās ca śvacittasāḍṛṣo
sarve ca satveṣu ni.... (Kp,6,p.13)

(21) 「彼は常に菩提藏の教説に立って波羅蜜を修行し、また、(慈悲を行なう) 巧みな手立て (善巧方便) を有する。高慢心がないから、犬の（心のごとき従順な）心をもち、生きとし生けるものすべてに対する慢心が破られている。」（長尾・桜部 [1974/2003] 17 頁）

(21bp)・・・高慢心のないこと (*nirmānatā*) の故に、犬の心 (*śva-citta*) を持つ者
 のようであり (*sāḍṛṣa*)⁽²⁵⁾ / 犬のような心を持ち (*śva-citta-sāḍṛṣa*)、・・・
 （拙訳部分）

同じ事態が散文 (xx) と韻文 (xxi) で描写されているようだ。テキストが必ずしも十分ではないが、ここには「犬のような心を持つ」人間の存在が描き出されているようだ。犬が「従順で謙虚」かは今は問わない、「猿のような心を持つ」人間と「犬のような心を持つ」人間が対比的に描かれていると言えるのである。

本来心とは猿のようなものだ、人は、そうした猿の心を別の心に変えてゆくものである。心の鍛錬こそが人には望まれる。生まれつき猿の心を持たぬ人もいる。猿の心をもって生まれてきた人も徐々にその心を変えてゆく。猿の心を犬の心に変えることが求められている。心を支配する、心とは意志のままにならないものである。心を自分の意志のままにコントロール出来るようにならなければならない。仏教の目指しているのはそのようなことだろうか？ 『大宝積経』「迦葉品」に「猿のような心」と共に、「犬の心」が見られるのはその意味で興味深い。「犬の心」はポジティブなものであり、「猿のような心」はネガティブなものである。なお、長尾・桜部氏による訳文 (21) 中の「犬の（心のごとき従順な）心をもち」との興味深い明確な解釈が示されていることも指摘しておくべきだろう。

以上で、「猿の心」「猿の心を持つ」kapi-cittaが、どのような人間の様態を指示する譬喩的表現かの一応の検討を終える。この結果からも「猿の心」が「鬱金の色」とどのように異なるかは必ずしも明確にならなかったと思われる。人間の一つの様態・性情を「鬱金の色を持つ」と表現しようが、「猿の心を持つ」と表現しようが、それは決して相互に類別的な機能を果たし得ないものである。ある人物が気まぐれな人であると言おうとして、時に「鬱金の色を持つ」と表現し、時に「猿の心を持つ」と表現すると考えたい。したがって、『ジャータカ』の父親の息子に対する教訓とは、「鬱金の色を持つ」人には仕えるべきではないし、「猿の心を持つ」人には仕えるべきではないし、さらにまた「熱しやすく冷めやすい」人には仕えるべきではないことを教え諭したものと理解すれば事足りたのである。父親によって、「鬱金の色を持つ」タイプ1の人、「猿の心を持つ」タイプ2の人、「熱しやすく冷めやすい」／「種々の食欲に染まりたる」タイプ3の人が明確に意識されていたわけではないと考えるべきであろう。

むすびにかえて

以上、人間の一つの気質を表現するにあたってしばしば用いられる「猿」ないし「猿の心」をめぐって若干の考察をした。「変わりやすく」「移ろいやすく」「飽きやすい」気質に用いられる「猿の心」。「猿の心を持つ」と敢えて表現するのは、「猿のような人」と言った場合、猿のどのような面が意図されているのか不明だが、「猿の心」という具合に限定したならば、その気質のことであると諒解されるからではないだろうか。その人が猿に似ているわけではない。似ているのはその人の心である。その意味で『大宝積経』「迦葉品」の「心は猿に似ている」という譬喩的表現の持つ意味は重要であろう。人間が「猿の心を持つ」はずもないのである、「人間はみな心を持つ」、したがって人間はみな「猿のような心」を持っているのである。「猿の心を持つ」との表現は、心が陶冶されていない、飼い慣らされていない、粗野な人間を腐してのものと考えるべきであろう。人間はみな「猿のような心」を持って生まれてくる、それを陶冶し調教することによって人間としての幸せに到達することが出来る、そのようなインド人の「心」に対する見方が反映した表現である。『ヨーガスートラ』Yogasūtraの冒頭 (I-2) で「ヨーガとは心作用の抑制である」yogaś citta-vṛttinirodhaḥと説いていることが想起される。「猿の心を持つ」という表現は、猿の心を持つ人と猿の心を持たない人がいると言おうとしているのではなく、猿

にも似た誰もが持って生まれる「心」を陶冶した人（陶冶せんとした人）と「心」をそのままに野放しにした人がある、とのインド的観察を反映させた譬喩語であると見なすべきであろう。

(xvii) yathā agāraṃ ducchannaṃ vuṭṭhi samativijjhati

evaṃ abhāvitaṃ cittaṃ rāgo samativijjhati. (Dhp 13:p.4)

(22) 悪しく蔽われた家に雨が洩れ入るように、修養していない心に愛が侵入する⁽²⁶⁾。(拙訳)

【略号・テキスト・参考文献】

Ak:Amarakośa (AdyarLEd.)

Dhp:Dhammapada (PTSEd.: [1995r])

H:Hitopadeśa (PetersonEd.: [1999r])

H[K]:Hitopadeśa (KaleEd.: [1976r])

J:Jātaka (PTSEd.)

Kp:Kāśyapaparivarta (Staël-HosteinEd.: [1926])

Ks:Kāmasūtra (NirṇayaSEd.: [1900r])

Mbh:Mahābhārata (PoonaCrEd.:text only), 5 vols

R:Rāmāyaṇa (NirṇayaSEd.: [1983r]), 2 vols.

R[C]:Rāmāyaṇa (BarodaCrEd.)

RR:Rāma's Comm. ad R → R

Sn:Suttanipāta (PTSEd.)

Ss:Suśrutasaṃhitā (NirṇayaSEd.: [1980r])

Therag:Theragāthā (PTSEd.: [1999r])

Uv:Udānavarga (BernhardEd.: [1965])

YKs:Yaśodhara's Comm. ad Ks → Ks

Cowell, E.B.,ed.

[1897]:*The Jātaka or Stories of the Buddha's Former Births*. Vol.III.,Cambridge.

Dutoit,Julius

[1911]:*Jātakam:Das Buch der Erzählungen aus früheren Existenzen Buddhas*. Vol.III,Leipzig.

Deshpande, Madhav M.

[1997]:*Saṃskṛtasubodhinī:A Sanskrit Primer*,Michigan.

Dutt,Manmatha Nath

[1998r]:*Ramayana*,4vols,Parimal Publications:Delhi..

GītaPress

[2001]: *Śrīmad Vālmiki-Rāmāyaṇa with Sanskrit Text and English Translation*, 2 vols, Gorakhpur.

Gonda, Jan

[1949]: *Remarks on Similes in Sanskrit Literature*, Leiden. [vii, 121p]

Kern, H.

[1888]: *Bijdrage tot de Verklaring van Eenige Woorden in Pali-Geschriften Voorkomende*, Amsterdam.

Nagar, Shantilal

[2004]: *Hanumān: Through the Ages*, 3 vols, Delhi.

Onians, Isabelle

[2005]: *What Ten Young Men Did, by Daṇḍin*, New York.

Pathak, Madhusudan Madhavlal

[1968]: *Similes in the Rāmāyaṇa*, Baroda.

Renou, Louis

[1930/1961r]: *Grammair sanscrite*, Paris.

Sharma, Priya Vrat

[2000]: *Nāmarūpajñānam, A Study on 150 Plants*, Varanasi.

Shastri, Hari Prasad

[1959//1992r]: *The Ramayana of Valmiki*, 3 vols, London.

阿部慈園

[1988]: 「猿—こころの動き」『仏教動物散策』（東京書籍）

岩本裕

[1980-85]: 訳『ラーマヤナ』1～2巻（平凡社）

金倉圓照・北川秀則

[1968]: 訳『ヒト—パデーシャー—処世の教え—』（岩波書店）

金沢篤

[1998]: 「カーマの矢—インド愛神考序説—」『駒大仏研紀要』第56号

[2005]: 「ダマヤンティーの美 (1) —rūpa と vapus を中心に—」『駒大仏研紀要』第63号

[2007]: 「蓮の眼 (1) —ラーマの形象表現を手がかりに—」『駒大仏研紀要』第65号

上村勝彦

[2002]: 訳『マハーバーラタ』1～7巻（筑摩書房）

川本暢

[2007]: 「サンスクリット語における詩的言語の研究—ダンディン作『カーヴィヤ・アーダルシャ』にみる直喩の用法分析—」『松波誠達先生古稀記念 梵文学研究論集』（大祥書籍）

栗原廣廓

[1938]: 訳「散乱本生物語」（第 435 話）『南伝大蔵経』第 33 卷（大蔵出版）

立花俊道

[1935]: 訳「森林本生物語」（第 348 話）他『南伝大蔵経』第 31 卷（大蔵出版）

辻直四郎

[1974]: 著『サンスクリット文法』（岩波書店）

長尾雅人・桜部建

[1974/2003]: 訳『宝積部経典《大乘仏典 9》』（中央公論社）

中村元

[1982]: 訳『仏弟子の告白—テラガター—』（岩波書店）

[1984]: 訳『ブッダのことば—スッタニパーター—』（岩波書店）

[1978]: 訳『ブッダの真理のことば感興のことば』（岩波書店）

松村恒

[1988]: 訳「林間前生物語」（第 348 話）他『ジャータカ全集』第 4 卷（春秋社）

松本照敬

[1982]: 訳「気まぐれ息子前生物語」（第 435 話）『ジャータカ全集』第 5 卷（春秋社）

【註記】

(1) 金倉・北川 [1968] 112-112 頁参照。

(2) 435 話「散乱本生譚 *haliddirāgajātaka*」にも同一と言い得る詩がある。

(3) 435 話中の相当詩に対する栗原廣廓訳、松本照敬訳を参考までに引く。

「息子よ、汝森を去らば／汝を信じて聴かむとし／汝の信頼と同棲に／堪ふる人をば求め仕へよ／汝今森を去らば／身口意の過失なき／人を求めて師と崇め／そが懐に抱かるべし／・・・／汝今森を去らば／非人の状に落魄すとも／①②③猿猴の心動きて止まぬ／人に師事すること勿れ」（栗原 [1938] 169-170 頁）

「息子よ、おまえを 信頼し／おまえの信に 堪うる人、／がまん強くて 誠実な／人に仕えよ、ここ去らば・・・／身体と言葉と 心とに／過失なき人、その人の／胸に抱かれて 奉仕せよ。／おまえがここを 去るならば・・・／・・・／たとえ人には あらずとも／①気まぐれ②猿の ころもち／③愛欲により 色あせた／人には、息子、仕えるな。」（松本 [1982] 239 頁）

(4) 「身にも、ことばにも、心にも、悪い事を為さず、三つのところについてよくつつんでいる人、一かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。」（中村 [1978] 65 頁）

(5) 使用・不使用を含めて *ca* の用法と意味に関しては別稿を期す。今は一例として以下の用例を引くに留める。

aśrāddhcbhiḥ kadaryebhiḥ piśunair vibhūtinandibhiḥ /

sākhyaṃ kurvīta na prājñāḥ saṃgatīḥ pāpair hi pāpikā // 25.1 [538]

śrāddhebhīḥ peśalebhīś ca śīlavadbhir bahuśrutaiḥ /

sākhyaṃ kurvīta saprajñāḥ saṃgatir bhadrair hi bhadrīkā // 25.2 [539]

(Uv XXV-1-2:p.99)

智慧ある者は、信仰心のない者たち、貪欲な者たち、陰口をきく者たち、繁栄を喜ぶ者たちとの交際を為すべきではない。なぜなら悪しきものたちとの接触は罪有るものであるから。<1>

智慧ある者は、信仰心を持ち、清浄にして、戒を保っている、多聞なる者たちとの交際を為すべきである。なぜなら尊きものたちとの接触は尊きものだからである。(拙訳)

「明らかな知慧のある人が友達としてつき合ってはならないのは、信仰心なく、ものおしみて、二枚舌をつかい、他人の破滅を喜ぶ人々である。悪人たちと交るのは悪いことである。／明らかな知慧のある人が友達としてつき合うべき人々は、信仰心があり、気持のよい、素行のよい、学識ゆたかな人々である。けだし立派な人々と交るのは善いことである。」(中村 [1978] 237 頁)

pisunena ca kodhanena maccharinā ca vibhūtinandinā sakhitaṃ na kareyya paṇḍito; pāpo kāpurisena saṃgamo. //1018//

saddhena ca pesalena ca paññavatā bahussutena ca sakhitaṃ hi kareyya paṇḍito;

bhaddo sappurisena saṃgamo.//1019// (Therag 1018-1019:p.91)

聡明な者は、陰口をきく者、怒れる者、嫉妬深い者、繁栄を喜ぶ者との交際を為すべきではない。悪人との接触は悪しきことである。<1018> 聡明な者は、信仰心を持ち、清浄な、智慧ある、多聞なる者との交際こそを、為すべきである。善人との接触は尊きことである。<1019> (拙訳)

「聡明な人は、一二枚舌を使う人、怒り易い人、けちな人、そして(他人の)破滅を喜ぶ人と、つき合ってはならない。悪人と交わるのは、わざわいである。

聡明な人は、一信仰心があり、気持ちのよい、明らかな智慧をそなえ、学識ある人と、つき合うべきである。立派な人と交わるのは、しあわせである。」(中村 [1982] 191 頁)

- (6) 「身にも、ことばにも、心にも、悪い事を為さず、三つのところについてよくつつんでいる人、一かれをわれは<バラモン>と呼ぶ。」(中村 [1978] 297 頁)
- (7) 筆者が立花訳の「猿のそのの如く」に注目したのは、kapi-citta「猿の心を持つ」の解釈に際し、日本語の「蜻蛉の命」という言葉の意味を考えていたせいでもある。

『広辞苑』には「蜻蛉」が立項されていて、以下のように説明が与えられている。

《①トンボの古名。源氏物語蜻蛉「一の物はかなげに飛びちがふを」

②カゲロウ目の昆虫の総称。体も翅も弱々しく、2本または3本の長い尾毛がある。夏、水辺を飛び、交尾・産卵を終えれば、数時間で死ぬ。幼虫は2～3年を経て成虫に羽化。はかないものたとえに用いる。かぎろう。青蚨せいふ。朝顔。蟋ひおむし。〈圍秋〉。徒然草「一の夕を待ち、夏の蟬の春秋を知らぬ」

ところが『広辞苑』には「蜻蛉の命」も立項されており、「蜉蝣のそれのようにはかない人の命。」と説明されているのである。一見合理的な記述で好感が持てる。おそらく自分も執筆者ならば、ふとそのように書きつけてしまうかも知れないとは思っているのである。蜻蛉と呼ばれる生物、人間と呼ばれる生物、その両者を比較して、蜻蛉に命があり、人間に命がある。そしてついその両者を比較して、蜻蛉の命も「はかない」し人間の命も同じように「はかない」と言おうとしているわけではない。「蜻蛉ははかない」ということは周知のことである。「人間ははかない」と言おうとしているわけではないのである。その人は「人間の命ははかない」と言おうとしているのである。

『広辞苑』の「蜻蛉」の項目に対して「はかないものたとえに用いる」と記した者は、そのように理解していた筈である。だが「蜻蛉の命」の項目を「蜻蛉のそれのようにはかない人の命」と記した者は、別の次元に在ると言うべきである。「蜻蛉」の項目の執筆者なら、「蜻蛉の命」を「蜻蛉のようにはかない人の命」と記した筈なのである。「蜻蛉の命」と同じように、日本語には「蚕の心臓」という言葉がある。「蚕の心臓を持つ」との表現に対しては、「蚕のそれのように小さい人間の心臓」と言おうとしているのではなく、ただ「蚕のように小さい心臓を持つ」と解するのが自然であろう、筆者はそう考えた。「猿の心のように揺れる／移ろう人間の心」ではなく、「猿のように揺れる／移ろう人間の心」で十分であると考えたのである。

- (8) 金沢 [2007] 参照。
- (9) Renou[1930/1961r] は、辻 [1974] と同様に所有複合語に関しては必ずしも網羅的組織的に論じていないが、*Dans la langue litteraire recherchee se developpe un type sans correspondant dans les tatpur., qui implique au premier terme une comparaison : vidyutprabha- ep. <<qui a l'eclat de la foudre>> (vidyuta iva prabhā yasya) . (p.115)* と記している。
- (10) 譬喩的表現は、インドでも修辞学 (alaṃkāra) の分野で古来掘り下げられており、それらに関しては研究も蓄積されている。本稿ではそれに立ち入ることは出来ないが、日本人によるごく最近の研究として川本 [2007] を紹介しておきたい。
- (11) 『スシュルタ本集』などのインド古典医学書にあつては、鬱金 (haridrā) の薬物としての効能が種々記載されている。

ctau vacā-haridrā-ādī gaṇau stanya-viśodhanau /

āma-atīsāra-śamanau viśeṣād doṣa-pācanau //28// (Ss I-38-28:p.166)

・・・、鬱金 (haridrā) などのグループは、母乳を浄化し、急性下痢を止め、特に [この急性下痢に起因する] 悪化病素を解消する)・・・(拙訳)

- (12) この haridrā/hallidi-rāga を「鬱金 (haridrā/hallidi) の色 (rāga)」と解釈することには問題がないわけではない。以下の『マハーバーラタ』の用例などでも明らかかなように、「鬱金」という植物を意味する haridrā が、同時に「鬱金の色」を意味する語としても用いられることがあるからである。したがって、「鬱金の色を持つ」という形容句を「鬱金の色 (haridrā) のような [長続きしない] 愛 (rāga) を持つ」と解することも可能になる。

parvata-ābhoga-varṣmāṇaṃ bhogaiś candra-arka-maṇḍalaiḥ /

citra-aṅgam ajinaiś citrair haridrā-saḍṛśa-chavim //13// (Mbh III-175-13)

「それは山のような巨体で、月輪や日輪のような頸部ふくらみを持ち、種々の色の皮で美しい身体を持ち、うこん色をしていた。」(上村 [2002] iii .510 頁)

山のようにうねった頂を持ち、月輪・日輪のような膨らみを持ち、色とりどりの肢体を持ち、美しい羚羊の毛皮によって、鬱金 (haridrā) と類似 [色] の (saḍṛśa) 皮膚 (chavi) をしていた。(拙訳)

- (13) Apte の他に、Böhrtlingk 梵語辞典にも

「鬱金の色を持つ」「気紛れな愛を持つ」として、ハラユダによる説明

“kṣaṇamātra-anurāgaś haridrā-rāga ucyate” が引かれている。残念ながら筆者はハラユダ自身の著作を参照していない。ハラユダの名前を出していないとしても他の辞典の記述はいずれも似たり寄ったりで、ハラユダの記述を典拠としたものが多い。現実のターメリックによる「黄色」が、そのように長続きせずに色褪せてしまうものかは不明。

- (14) 「《・・・或はまた、「あの人は彼方の女に欠点を見出し、そして今では妾に勝れた美点を認めているのであるから、妾の美点を知っているあの人は特に(沢山の財貨を)妾に呉れるであろう。」とか(考えられる場合には撚りを戻すべきである。併し)、》その男が子供であって、絶えず彼の眼は動揺しているとか、彼は瞞されているとか、或は愛情を持っているが、鬱金の色の如くに褪せやすいであろうとか、或は(彼の申出を妾が聞かないときは)何か(災禍を妾に)与えるかも知れないとか認められる場合には(十分に検討して)撚りを戻したり或は戻さなかつたりすべきである。」(岩本 [1980-85] i 270 頁)
- (15) Kern[1888],p.73 は III,81 としているが、III,88 の誤記であろう。
- (16) 先に見た水野弘元著『二訂 パーリ語辞典』の記述「速変せざる」は、『ジャータカ』のこの註文の誤読に起因するものかもしれない。
- (17) 心ないし猿の気質を表現する言葉に、cal- という動詞に由来する cala 「移ろう、

動く」、camp- という動詞に由来する campala 「動揺する」が多用される。

- (18) 「前の（師など）を捨てて後の（師など）にたより、煩惱の動揺に従っている人々は、執着をのり越えることがない。かれらは、とらえては、また捨てる。猿が杖をとらえて、また放つようなものである。」（中村 [1984] 178 頁）
- (19) 「一〇八〇 浮わつていて、ふらふらしている修行者が、たとい、ボロ布でつづった衣をまとっていても、そうだからとて、かれは立派には見えない。一猿が獅子の毛皮をまとっているようなものである。／一〇八一 浮わつくことなく、ふらふらせず、賢明で、もろもろの感官をよくととのえた者は、ボロ布でつづった衣をまとっていても、立派に見える。一山窟に住む獅子のように。」（中村 [1982] 200 頁）
- (20) 「恣のふるまいをする人には愛執が蔓草のようにはびこる。林のなかで猿が果実を探し求めるように、（この世からかの世へと）あちこちにさまよう。」（中村 [1978] 57 頁）
- (21) Rhys Davids の Pali-English Dic. には kapi の項目の下、kapi-citta もあり、”having a monkey’s mind,”capricious,fickle と説明されている。（p.186）この capricious,fickle という意味は、例えば Monier-Williams の Sanskrit-English Dic. の haridrā-rāga の意味と同一である。このことから、「鬱金の色を持つ」と「猿の心を持つ」の両者が類別を意図してのものではないことが推測されよう。
- (22) “Is it due to the levity of thy monkey nature that I do not behold Kakutstha, the illustrious Rama, Scrouge of His Foes ? Neither are those monkeys, able to change their form at will, to be seen ?” (Shastri[1959//1992] iii,p.362)
- (23) 「だから、人間の意見というものは動き易いものゆえ、余の心が混乱しないあいだに、そなたに灌頂をしておこう。」（岩本 [1980-85] ii 22-23 頁）
“Therefore, O Rāghava, my thoughts change, be you installed (in the kingdom) , for fickle is the mind of all creatures.” (Dutt[1998r],i,p.13)
- (24) 「しかし、余が思うに、人間の心というものは変わり易いのであつて、平素正義を遵奉している有徳の人々にとつても、心変りということはよくあることなのだ」（岩本 [1980-85] ii 23 頁）
“But in my opinion , the hearts of men are einconstant, and, O Rāghava, the hearts even of the virtuous change by the action of the natural impulses.” (Dutt[1998r],i,p.13)
- (25) この解釈に際しては、前述 (vi) に対する拙訳 (6) を参照のこと。
- (26) 「屋根を粗雑に葺いてある家には雨が洩れ入るように、心を修養してないならば、情欲が心に侵入する。」（中村 [1978] 11-12 頁）